

令和 3 年 5 月 28 日現在

機関番号：11501

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2020

課題番号：18K00182

研究課題名（和文）尻の下のイメージ：ドイツにおける聖職者席下部彫刻ミゼリコルディアの総合的研究

研究課題名（英文）Image under the Buttocks: Synthetic Studies of Misericords in the Germany

研究代表者

元木 幸一（MOTOKI, Koichi）

山形大学・人文社会科学部・名誉教授

研究者番号：10125669

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,600,000円

研究成果の概要（和文）：教会内部の主祭壇を囲む空間を内陣という。聖職者など重要な人物が座す場所である。その内陣の椅子を内陣席（聖職者席）というが、その裏面には彫刻装飾付きの小座板がついており、そこをミゼリコルディア（憐れみ）という。ミゼリコルディアは、起立が義務付けられた儀式の際、老人や身体障害者が着座することが許された小さな椅子である。本研究では従来ほとんどなかったドイツ教会のミゼリコルディア・イメージの意味と、その内陣席全体構造との関連、そしてその機能を分析した。さらに主要な4地域毎にその歴史の変遷や社会的背景を考察した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ドイツ・ミゼリコルディアの主要モチーフは仮面である。最古の年記を持つアインベック聖アレクサンドリ聖堂の主要モチーフは葉状仮面で、グリーンマンという森の生命を暗示する。この地域はハルツ山地という魔物信仰が盛んな地域で、それが内陣の美術に反映している。また16世紀初期ウルム・ミュンスターでの主要モチーフはロバ耳の帽子を被る阿呆仮面である。これは同時代文学や版画などに登場する大衆文化のイメージである。このようにして中世の教会の中に市民生活の要素が入り込んでいることが美術の側面から解明された。

研究成果の概要（英文）：The most sacred space in a church is called a choir, where the high clergymen sit down. There are choir stalls, which have misericords. This research seeks to analyze the meanings of misericords and the structure and functions of the choir stalls in the four regions of Germany.

研究分野：美学美術史

キーワード：内陣席 ミゼリコルディア グリーンマン ネーデルラントの諺 阿呆仮面 肘掛け 聖職者席

#### 1. 研究開始当初の背景

ミゼリコルディアの意味と機能の探求が目的だったが、イギリス、フランス、ネーデルラント、スペインではすでに E.C.ブロックなどの研究で成果が出ていたが、ドイツに関しては低ライン地方以外は総合的な研究がまだ発表されていなかった。

そこで、本研究では低ライン地方以外に、ハルツ山地地方、マクデブルク、シュヴァーベン地方の多くの聖堂を取り上げようとした。時代的には 13 世紀末から、16 世紀初めまでという広範な範囲で研究を進めようとした。

#### 2. 研究の目的

上記したドイツ 4 地域のできるだけ多くの聖堂を調査することで、E.C.ブロックの不足を補い、各聖堂のミゼリコルディアの形式的特徴を分析し、さらに意味と機能を具体的に考察する。特にドイツにおけるミゼリコルディアの顕著な特徴である仮面モチーフの多様性および歴史の変遷を分析する。

#### 3. 研究の方法

ドイツ 4 地域の 14 の聖堂内陣を实地調査し、内陣席のミゼリコルディア、肘掛け、側面板頂部、側面板、背板レリーフなどのモチーフを詳細に観察し、その相違を分析する。さらに、内陣席のそれら多様な部位の関係を分析することで、教会内陣の構造を意味的に考察する。そして、それらの特色と聖堂の地理的・社会的背景との密接な関係を解明する。

#### 4. 研究成果

##### 【1 ミゼリコルディアの変貌：グリーンマンから阿呆仮面へ】

13 世紀末のハルツ山地地方アインベックの聖アレクサンドリ聖堂ではミゼリコルディア、肘掛けで、葉状仮面がひじょうに多数見られる。それはハルツ山地との地理的關係からグリーンマンと呼ぶことができる。グリーンマンとは、森の民の生命の象徴なのである。葉と仮面が結合したグリーンマン・モチーフは、アインベックのみならず、ケルン大聖堂内陣席でも、そしてマクデブルク大聖堂内陣席でも、そして 1298 年のヴァッセンベルク聖ゲオルク聖堂旧蔵「狼のような怪物仮面」でも見られる<sup>1</sup>。ヴァッセンベルク作は一見すると狼の顔に見えるが、耳、目、鼻などの各部をよく見ると、それぞれ葉から構成されていることに気づく。つまり、これは植物と動物が混合した仮面なのである。森林そのものと言える怪物である。変化したグリーンマン、あるいはアンダーソンによる分類に従えば<sup>2</sup>、第三分類である寄せ絵風のグリーンマンである。

13 世紀末から 14 世紀にかけての仮面はグリーンマンを表していることが多いのである。ハルツ山地地域ではほとんどがグリーンマン仮面であり、マクデブルクなどでもグリーンマン仮面がしばしば登場する。

ところが 15 世紀後半になると状況が大きく変化する。

まずは、低ライン地方のミゼリコルディア、例えば、15 世紀末のエッメリヒ聖マルティニ聖堂ミゼリコルディアを見てみよう。ここにはグリーンマンどころか、仮面自体がまったく登場しない。エッメリヒは中世末期まではユトレヒト司教区に属していた。そのユトレヒト司教区に属する低ライン地方のミゼリコルディアにはほとんど仮面が現れないのである。代わりにネーデルラントの諺モチーフが頻りに現れる。このように見ると、この低ライン地方のミゼリコルディアはドイツの中でもネーデルラント特有のモチーフにより表現されているといえよう。この

<sup>1</sup> 現在はケルン、シュニユットゲン美術館蔵。E. C. Block, *Misericords in the Rhineland*, p. 97; U. Bergmann, *Schnütgen-Museum. Die Holzskulpturen des Mittelalters (1000-1400)*, Köln, 1989, pp. 221-226.

<sup>2</sup> アンダーソン 『グリーンマン ヨーロッパ史を生きぬいた森のシンボル』板倉克子訳、河出書房新社、1998 年、7 頁参照。

ミゼリコルディアの諺イメージが将来のブリューゲル作品などに発展するのである。

さて、低ライン地方と遠く離れたドイツ南西地域のシュヴァーベン地方では、さらに異なる変化が生じる。シュヴァーベン美術の中心ウルム・ミュンスターの内陣席では仮面がいくつも現れるが、グリーンマンではない。ウルム・ミュンスターの内陣席ミゼリコルディアに現れるのは口バ耳帽子の仮面なのである。口バ耳帽子は阿呆の帽子である。ここには口に両手の指を突っ込んで口角を引っ張り、舌を出している阿呆以外にも、舌を出していない阿呆や狸のような顔の阿呆など、多種の阿呆が見られるのである。これらの仮面はグリーンマンのような民俗的な意味を持つ仮面ではなく、ドイツ中世末期に流行したユーモア文学と軌を一にする仮面なのである。ドイツ・ユーモア文学の代表作の一つである『ティル・オイレンシュピーゲルの愉快ないたずら』<sup>3</sup>にも登場する阿呆的な存在は、同時代の大衆的な版画など、多彩な美術ジャンルにも頻繁に登場する<sup>4</sup>。ティル・オイレンシュピーゲルの挿絵版画を一部担当したのは、あの若きデューラーだったのである。ここに文学と美術の共通性・相互交流が顕著に現れている。

## 【2 背板イメージと側面板頂部彫刻：聖と俗の対立構造】

ミゼリコルディアが普段は内陣席に座す人の視野に入っていない場所であるのに対し、いつも見える位置にあるのは椅子の背後にある背板のレリーフである。聖職者席の背後の高い位置にあるのが背板のレリーフだが、実は初期のアインベックなど13世紀末にはまだあまり利用されていない。ケルン大聖堂やマクデブルク大聖堂など14世紀の内陣にも背板レリーフは登場しない。

頻繁に利用されたのは、15世紀後半から16世紀初めにかけてのシュヴァーベン地方の聖堂である。ウルム・ミュンスター、ヘレンベルク参事会聖堂、メミンゲン聖マルティン聖堂では、いずれも十二使徒、預言者たち、聖人たち、キリストなどが半身像レリーフで表されている。つまり聖書の主役たちが上から内陣席を見下ろしているのである。

この三つの聖堂では側面板頂部に、プトレマイオス、ウェルギリウスなど異教徒の古代偉人、巫女たち、大学四学部や自由七学芸の擬人像、市長など市政の重要人物、教会の主要役職など、キリスト教の教義と直接関係のない人物像が堂々とした丸彫りで表現されている。

そう考えて見ると、側面板頂部の人物像に対して、背板の預言者や十二使徒などのキリスト教的人物像は上から見下ろしているのである。下に世俗的な人物、上に聖書の人物が位置するというわけである。すなわち、これらシュヴァーベン地方の聖堂内陣では、明らかに聖俗の対比が意図的に構成されているのである。この地方では、その聖俗対立の構造が15世紀後半にほぼ完成を見たのである。

それに対し、13世紀末のアインベック聖アレクサンドリ聖堂に遡ってみよう。背板に人物レリーフはなく、細い支柱の柱頭に植物装飾、葉状仮面などが表現されているだけである。これはすぐ近くから振り返って見ないと視野に入らない小さく不便な場所のイメージである。つまり、聖職者たちが見ることを意識して作られたイメージではなからう。ケルン大聖堂には背板レリーフはなく、またマクデブルク大聖堂でもトレサリーの枠があるのみである。これらの13世紀から14世紀の聖堂には、シュヴァーベン地方の聖堂における側面板頂部のような丸彫による

<sup>3</sup> 『ティル・オイレンシュピーゲルの愉快ないたずら』阿部謹也訳、岩波文庫、1990年。

<sup>4</sup> 拙論『中世末期ヨーロッパ北方美術におけるユーモア表現 平成27～29年度科学研究費（学術研究助成基金助成金）基盤研究（C）研究成果報告書』（課題番号15K02132）、12-13頁。

大きな半身人物像も見られない。つまり、これら初期の三つの聖堂には聖俗の構造的対比が意図されておらず、背板はレリーフの場所として意識されていないように思われるのである。

これら対立的な二組の内陣構造とかけ離れているのが、15世紀後半エッセリヒ聖マルティニ聖堂の背板である。ここでは高位聖職者による寄進者家系の紋章が左右に父方と母方に分かれて表現されている。そして側面板頂部には、受難具を描いている盾型紋章をもつ犬と鷲、そして動物で表現している諺が表されている。ともに世俗的なモチーフだが、そもそもこのエッセリヒの聖堂には聖書的なモチーフがほとんどないのである。低ライン-ネーデルラント地域における聖堂の大きな特色と言えるかもしれない。

### 【3 ミゼリコルディアの機能と寄進者】

アインベックはハルツ山地南西に位置する<sup>5</sup>。ここは、魔女たちの宴「ヴァルプルギスの夜」が開催されるブロッケン山で知られているように、怪しげな魔物が彷徨するとされる地域だった。怪しげな魔物とは森に住む邪悪な存在としての野人である。そのような野人を「ローカル・デーモン」と呼ぶ。それに対してグリーンマンは善良な森の生命であり、グリーンマンが聖アレクサンドリ聖堂のミゼリコルディアや肘掛けなどに登場するのは、恐ろしき野人たちに対抗する意図、それらを聖堂内の聖なる空間に入らないようにする辟邪(魔除け)的な意図に基づくものなのだろう。

先にも述べたように、アインベック聖アレクサンドリ聖堂ミゼリコルディアには多くのグリーンマン(葉状仮面)が現れるが、中には口を開けたり、口角を上げたりして笑っているように見える仮面が登場する。その笑顔はどのような意味を有するのだろうか。我が国の考古学によれば、笑顔は悪霊を追い払う「辟邪」の効力を有するという<sup>6</sup>。このミゼリコルディアにおける笑顔も同様の意味を持つのではないだろうか。彷徨う魔物を聖堂に、ことに主祭壇のある内陣に入れないようにするための力、あるいは祈願がこれらの笑顔に込められていると推測される。

寄進者がブラウンシュヴァイク-グラーベンハーゲン公であるハインリヒ驚嘆公というハルツ地方に暮らす俗人君主であるということも、グリーンマン重視と関係するのではなからうか。ハルツ地方に暮らす寄進者は野人を恐れ、それを追い払うためグリーンマンに頼ったのだろう。アインベック聖アレクサンドリ聖堂の内陣席図像には、こうしてハルツ山地地方という特殊な自然環境に由来する文化的背景があるのである。

14世紀のマクデブルク大聖堂のミゼリコルディアや肘掛けには、ケルン大聖堂と同様に、グリーンマンが出現するが、それ以上に目立っているのは、大聖堂参事会員像や司祭像、助祭像である。マクデブルク大聖堂はドイツでは数少ない大司教座聖堂であり、内陣席の寄進者が大聖堂参事会である。ゆえに参事会の存在が否応なしに強調される。同じ大聖堂でもケルン大聖堂のミゼリコルディアでは踊り子や奏楽士が数多く見られ、ユーモアに溢れているように思われるのに対し、マクデブルクのミゼリコルディアでは、ケルンの影響下に踊り子や奏楽士のモチーフもあり、アインベックのようにグリーンマンや仮面のモチーフも見られるが、圧倒的に参事会員と彼らに善悪を知らしめるための美德・悪徳のテーマが多いのである。いかにも大聖堂参事会が注文して寄進した内陣席らしき教育的な図像である。典型的な大聖堂参事会注文の例といえるのではないだろうか。しかしながら、実は美德・悪徳にしても、特に悪徳においては笑う悪魔

<sup>5</sup> カール・ハーゼル『森が語るドイツの歴史』山懸光晶訳、築地書館、1996年、特に42-57頁。

<sup>6</sup> 設楽博己『顔の考古学 異形の世界史』吉川弘文館、2021年、56-57頁。

とともに表されることでユーモラスな表現となっているのではあるまいか。ここでの笑いはアインベックのような辟邪ではなく、善悪を示すという口実の下で、堂々とユーモアを示しているように思われる。ミゼリコルディアには、滑稽味が欠かせなくなってきたのである。

シュヴァーベン地方のウルム・ミュンスター（内陣席 1474 年設置）、ヘレンベルク参事会聖堂（同 1517 年）、メミンゲン聖マルティン聖堂（同 1507 年）などは、これらとは違って都市と深く関係している。ウルムのミゼリコルディアに阿呆仮面が登場したのは、中世末期の市民文化と深い関係があるだろう。すでに 1440 年以前にフランドルではミゼリコルディアに阿呆仮面が出現しているが、ドイツの銅版画に阿呆が登場するのはまさしくウルム・ミュンスター内陣席と同時代なのである。例えば、ライン上流域で活躍した E. S. の版画家による《阿呆と裸女》(L.208)<sup>7</sup>は 1470 年頃の作品である。この版画家の現存する最も古い年記は 1467 年であることから、まさしく同時期、同じ南西ドイツの美術に阿呆が現れたということになる。このミュンスターがウルム市民たちの出資で作られたことを考えると、ミゼリコルディアに大衆的な市民文化が反映し、側面板頂部に古代の学者や詩人たちの半身像が現れることで教養ある市民文化が顔を出すというのはまことに興味深い。表に顔を出すのは教養ある市民文化であり、裏に密かに登場するのは大衆的な市民文化であるということだろうか。

ヘレンベルク参事会聖堂では、側面板頂部で四学部（神学、医学、法学、哲学）と自由七学芸（文法、修辞学、弁証法、算術、幾何、音楽、天文学）の擬人像が登場するが、これはヘレンベルクが近接するチュービンゲン大学が 1477 年にその四学部を備えて創設されたことと関係するだろう。寄進者ヨハネス・リプマンはこの大学の出身者であり、神学博士号を取得したのである。このミゼリコルディアは半円形だけで具象的イメージがないので、肘掛けや、側面板、側面板頂部に、首席司祭、聖職者、寄進者、職人親方、ベギンなど、この教会と都市に密接な関係をもつ人物像が主に現れる。

メミンゲン聖マルティン聖堂でも、ミゼリコルディアは半円形の小座板だけで、肘掛け、側面板、側面板頂部に、都市貴族、教会主要メンバー、市長夫妻や副市長夫妻などが登場する。現実の人物である。この聖マルティン聖堂は、きわめて市民的色彩が強いように思われる。いかにもメミンゲン市の教会と主張しているようである。この聖堂は、側廊部などにも、おそらく 19 世紀頃のものと思われる内陣席のような形式の座席が多数あり、しかもそこは特定の人物用の席らしく氏名プレートがつけられている。つまり、63 の内陣席以上に、この教会を支える人が増え、ある時期までは次々と自分用の座席を保有するようになったのである。

#### 【結語】

こうして内陣席の構造は、地理的条件、歴史的条件など多様な条件で異なり、一筋縄ではいかない複雑さをもつ。本研究はドイツ語圏の主要な 4 地域にとどまっているが、それでも、わが国ではほとんどなかった美術史的な内陣席研究への第一歩となるだろう。

---

<sup>7</sup> Meister E. S. *Ein oberrheinischer Kupferstecher der Spätgotik*, München-Berlin, 1987, p.82, Abb. 95.

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 元木幸一	4. 巻 17
2. 論文標題 グリーンマンの森 - アインベックの聖アレクサンドリ聖堂内陣席装飾をめぐって -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 山形大学大学院社会文化システム研究科紀要	6. 最初と最後の頁 19-40
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 元木幸一	4. 巻 なし
2. 論文標題 尻の下のイメージ：ドイツにおける聖職者下部彫刻ミゼリコルディアの総合的研究	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 学術研究助成基金助成金基盤研究（C）（一般）研究成果報告書	6. 最初と最後の頁 1-44
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 元木幸一	4. 巻 16
2. 論文標題 ユニークなミゼリコルディア：エムメリヒ、聖マルティニ聖堂の内陣席装飾について	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 山形大学大学院社会文化システム研究科紀要	6. 最初と最後の頁 30-50
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 元木幸一	4. 巻 3
2. 論文標題 持ち運ばれる祈りの絵ーヘラルト・ダーフィトの小二連画からー	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 ヨーロッパ中世美術論集	6. 最初と最後の頁 293-317
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 元木幸一
2. 発表標題 麗しきかなドイツの美術館
3. 学会等名 山形美術館
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 元木幸一
2. 発表標題 ドナウとラインと教会と
3. 学会等名 山美の美術講座
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

ユニークなミゼリコルディア：エッセリヒ、聖マルティニ聖堂の内陣席装飾について <a href="https://www-hs.yamagata-u.ac.jp/wp-content/uploads/2019/12/1e5957108d1359345d64a5da3c52a523.pdf">https://www-hs.yamagata-u.ac.jp/wp-content/uploads/2019/12/1e5957108d1359345d64a5da3c52a523.pdf</a>
---

6. 研究組織		
氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------